

第9条の会なごや 第12回総会記念企画

東京新聞原発取材班記者

片山夏子さん講演会

終わらない福島原発事故

作業員の取材からみえてくるもの



がれき除去作業 福島第1原発の4号機原子炉建屋

片山夏子(かたやま・なつこ)さん

化粧品会社、フリーター、埼玉新聞社を経て、中日新聞入社。

現在は中日新聞東京本社(東京新聞)社会部の原発取材班で活躍中。福島第一原発で働く作業員の人たちを取材し、現場での厳しい作業や被ばくとの闘いのほか、作業員の思いや日常を描いた「ふくしま作業員日誌」を執筆中。

東日本大震災の発生当時は名古屋社会部所属だったが、震災翌日から東京で東京電力や原子力安全・保安院(当時)を取材。昨夏に東京本社に異動。原発作業員の取材は、東京の特別報道部(「こちら特報部」)時代から。特報部では、原発作業員の労災問題の取材のほか、臓器移植を巡る問題を取材。名古屋社会部では、名古屋市のトレーラー横転事故など事件事故のほか、名古屋港水族館や生物多様性の取材などを担当。

2011年末、当時の野田政権は福島第1原発事故の収束宣言を発しました。しかし大事故を起こした原発からはいまだに放射能が放出されているばかりか、メルトダウンした燃料がどこにあるかも分からない(1~3号機)、使用済み核燃料のプールが崩落しかねない(4号機)危機が依然として続いています。次なる事故を食い止めるために、高線量の中で懸命に作業をしている労働者たち。彼らの取材を通じてみえてきたものを片山記者におおいに語っていただき、私たち自身の原発に反対する闘いの幅と深みを獲得しましょう。

2月2日(土)

13:30~16:30

生協生活文化会館
4階ホール

地下鉄「本山」駅4番出口徒歩2分
(COOP店舗上)

参加費: 500円(学生無料)

主催: 第9条の会なごや
連絡先: 090-9171-6038(加藤)

メディアの 観望

MEDIA

自民党政権に代わり、連日のように政策転換が伝えられる。原子力政策も、大きく後戻りする気配だ。でも、待つてほしい。東京電力福島第一原発では今も作業員が必死に収束作業をし、今も故郷に戻れない人が大勢いる。福島のことを忘れて議論が進んでいないか。

宣言後、「通常化」がアヒ



片山 夏子

福島を忘れていないか

■現場との乖離進む

二〇一一年十二月十六日。野田佳彦首相(当時)は「事故収束」を宣言した。敷地内では汚染水漏れが頻発し、溶け落ちた核燃料の状態も分からない。そんな中で突然の宣言に、作業員に衝撃が走っ

た。「言っている意味がわからない」「あり得ない」。現場の怒りは激しかった。宣言後、「通常化」がアヒ

ールされ、現場との乖離が進んだように感じる。危険手当打ち切りや宿代が出なくなつたなど待遇が悪化。さらに東電のコスト削減で工事単価が下がり、下請け作業員の待遇悪化が進む。ベテランばかりか、一般の作業員も集まらなくなってきた。

しながら、いつも心の中に一つの疑問がある。メディアは現場の声をきちんと伝えられているか。東京で記者会見を聞いていると、福島第一はすっかり落ち着いたような錯覚に陥る。敷地内の一部で全面マスクではなく医療用マスクでよくなるなど、装備の緩和も進む。東電は「現場が落ち

着いてきた」と、一方的に今年から記者会見を減らした。だが福島で、作業員の人たちと話をすると、毎回はっとする。「汚染水処理関係で一気に被ばくした」「今年の被ばく線量上限まであと二ヶ月(許)。三月まで持たない」「仕事が減り、いつ解雇されるか」。被ばく線量と闘う敵

場の本音が入る。作業員の負担軽減としてされた装備緩和のときも、「地震が多発しているのに何かあったらと不安」「一ヶ月でも被ばく線量を減らしたい。とても外せない」と不安の声が相次いだ。

■声を伝える手段は

新しい現場は、記者会見で感じる雰囲気とはまるで違う。二ユース以外にも、現場を伝えられる手段はないか。一昨年夏から続けている「ふくしま作業員日誌」は、福島第一での作業員たちの声を伝えようと始まった。そこには現

■経済だけを優先?

事故から二年目の冬。東京のクリスマスイルミネーションはきれいだった。東京にいと、事故がウソだったかのように感じる。最近の原発をめぐる動きは、福島のことを忘れて進んでいないか。経済だけが優先されていないか。福島で避難生活続ける人たちや、福島第一で働く作業員を忘れていないか。

先日会った作業員がつぶやいた。「今後もっと福島や現場が忘れられ、ひどいことになるのではと恐れている」

(東京社会部)